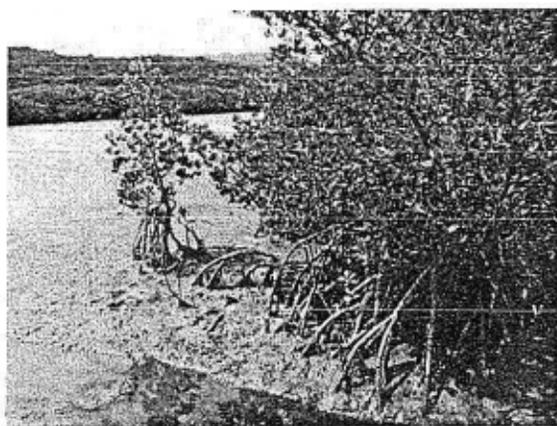
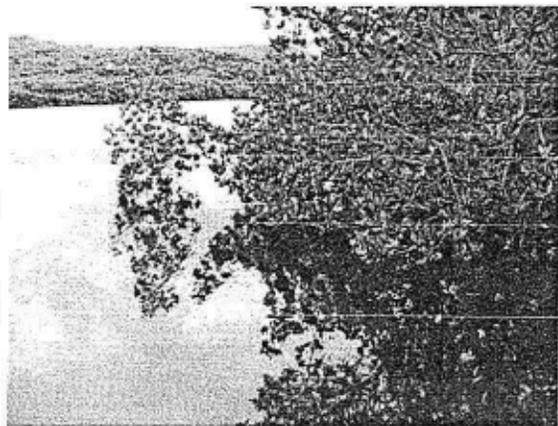


がいしい 海水につかってもがんばる木^き



しお
潮が引いた時



しお
潮が満ちた時

おきなわけんいりおしてしま
沖縄県西表島ヒナイ川の河口の様子です。左の写真は引き潮の時、右は満ち潮の時。立っている木はヤエヤマヒルギです。

ここは海のすぐ近くなので、1日に2回、高さで1.5メートルほどの潮の満ち引きがあります。そのたびに、ヤエヤマヒルギの根元は、干上がったり、川を逆流してくる海の水につかたりしています。

ヤエヤマヒルギは、水につかる部分の幹から、タコの足のような根っこを何本も出して、泥の上で体をささえています。また、水に沈んでいる間は、根は息ができませんから、タコ足は柔らかい泥の上に立ち、水に流されないようにするためだけではなく、空気ふれている時に、たくさん息をするためにも必要なものです。

海水が入り込む川の岸辺に生える植物には、オヒルギやメヒルギなど何種類もあって、まとめて「マングローブ」と呼んでいます。マングローブは暖かい地方の植物で、九州の南の端まで見られますが、富山のように冬の気温が5℃以下になるような地域には生えていません。

河口の泥には山から運ばれてきた栄養と海水が運んできた栄養の両方がたまるので、カニや貝、エビ、ハゼなど、たくさんの動物がすんでいます。引き潮になると彼らはいっせいに泥の中から出てきてエサをとります。マングローブにとっては、動物が掘る穴は、根に空気を届けやすくしてくれるので、たいへん助かっています。マングローブは、自分の力だけでなく、動物たちにも助けられて生きている植物です。

(太田道人)